浜松赤十字病院医学雑誌　11(1)：38－53，2012.

東日本大震災救護活動記録

Ⅰ．東日本大震災における救護活動員の派遣状況

救護班

	県支部通算	活動場所	活動期間	実働期間	職種別 医師		看護師		薬剤師		主事		浜病計	連絡調整員	帯同ボランティア	合計	活動内容
第１班	第１次	盛岡市 釜石市	3/11～16	3/12～15	1	伊藤　亮	4	浅岡みち子 鈴木美香代 半塲公義 小杉浩子	1	松原貴承	2	清水雅典 飯田武志	8	2		10	被害状況の調査 医療ニーズ等情報収集 仮設診療所の設営 巡回診療
第２班	第３次	釜石市 大槌町	3/16～20	3/17～19	1	俵原　敬	3	佐藤徳子 高橋栄樹 田口佳子	1	青山　平	2	前嶋秀隆 池ヶ谷真基	7	4	3	14	仮設診療所の運営 巡回診療
第３班	第６次		3/23～28	3/24～27	1	中野秀樹	3	小林ルミ 上月愛子 森上憲子	1	二橋智郎	2	岩崎張海 中島康裕	7	4		11	仮設診療所の運営 巡回診療
第４班	第９次	石巻市	4/6～10	4/7～9	1	浮海洋史	3 (1)	中村澄子 (野澤せい子) 金原弘枝	1	武田恵美	2	内藤勇夫 岡村直哉	6	2		9	病院支援(救急外来)支援 救護所・SSBの運営 患者搬送
第５班	第11次		4/17～21	4/18～20	1	井手協太郎	3 (1)	稲垣貴子 (伊藤宏子) 小田木敦子	1 (1)	(牧田道明)	2	伊藤晴康 上林豊司	5	2		9	救護所診療 巡回診療
第６班	第15次		5/15～20	5/16～19	1	小林正人	3	大西清美 土屋雅子 鈴木みさ子	1	小林美絵	2	古山智一 水谷全志	7			7	救護所診療 巡回診療
第７班	第16次		6/19～24	6/20～23	1	清野徳彦	3	松山麻須美 原田浩代 佐々木嘉美	1	村松英彰	2	飯島昭一 佐々木昌俊	7			7	救護所診療 巡回診療

(　　) 内の数字及び氏名は引佐赤十字病院所属

石巻地域への「こころのケア」要員

	本社通算	活動場所	活動期間	実働期間	職種別 医師		看護師		薬剤師		連絡調整要員		浜病計			合計	活動内容
第１回	第14次	石巻市	6/2～7	6/3～6			1	小島綾子			1	白柳かな美	2			2	避難所のこころのケア活動
第２回	第22次		7/4～9	7/5～8			2	川合晴美 井上美和子					2			2	避難所のこころのケア活動

石巻赤十字病院への支援要員

	本社通算	活動場所	活動期間	実働期間	職種別 医師		看護師		薬剤師		事務職員		浜病計			合計	活動内容
第１回	第９次	石巻赤十字病院	4/23～30	4/24～29							1	守田誠祐	1			1	石巻圏合同救護チーム本部支援
第２回	第13次	石巻赤十字病院	6/12～24	6/13～23			1	高橋栄樹					1			1	ER支援

Ⅱ．活動報告

第１班

一般・消化器外科副部長　伊藤　亮

１．活動の概要

１）活動期間　2011年３月11日～15日

２）チーム　　８名

伊藤亮一般・消化器外科副部長（班長），
浅岡みち子看護師長，鈴木美香代看護係長，
半場公義看護師，小杉浩子看護師，
松原貴承薬剤師，清水雅典主事，飯田武志主事

３）活動場所　岩手県釜石市，大槌町

４）活動日程

３月11日　午後８時52分　浜松赤十字病院出発
３月12日　午後２時35分　盛岡赤十字病院到着
３月13日　釜石市でdERUの開設
　　大槌町での被害状況，医療のニーズなどの情報収集
３月14日　大槌町での巡回診療
３月15日　釜石市での巡回診療

２．活動内容

１）発災から救護活動開始まで

東日本大震災が発生した３月11日午後８時52分に浜松赤十字病院救護班第１班として救急車１台，乗用車１台で病院を出発し，３月12日午後２時35分に盛岡赤十字病院に到着した．実際に救護活動を開始したのは３月13日からで，神戸赤十字病院DMAT，浜松赤十字病院，静岡赤十字病院の３班合同で１チームを形成し，盛岡市から約120km離れた沿岸の釜石市，大槌町で救護活動を展開した．

釜石市でdERUを設置中の３月13日に，約10km離れた大槌町から避難してきた被災者から同町の壊滅的な状況を聞くことになった．町唯一の総合病院である県立大槌病院や町役場が津波で浸水し，町長が行方不明となったこと，医療・行政ともに機能不全に陥っていることを聞き，日赤救護班による医療チームの介入が必要と判断した．翌日からは，浜松赤十字病院が大槌町の巡回診療にあたり，静岡，神戸赤十字病院が釜石市のdERUでの診療と，２班に分かれて医療活動を展開することになった．

２）大槌町の巡回診療

３月14日は大槌町に設けられた４か所の避難所の巡回診療に当たった．巡回したのは，①中央公民館（約500名），②かみよ稲穂館（約240名），③大槌高校（約900名），④吉里吉里小学校（約300名）であった．実際に行ったことは，各避難所における医療状況の把握，被災者の全体像の把握，医薬品のニーズ把握，医薬品提供であった．避難所によって医師常駐の医務室があったり，看護師が内服薬を一括管理していたり，往診医が巡回していたりと様々だった．各避難所の共通点は，情報伝達手段・移動手段がないため，各避難所間や町の災害対策本部との間で全く連携が取れていないこと，高齢者が多いことから，慢性疾患（高血圧，糖尿病など）の処方希望と発災早期から不眠を訴える患者が多いこと，とにかく医薬品が絶対的に不足していることだった．

３）医療救護活動を終えて

今回の救護活動を経験して痛感したのは，①情報不足，②通信伝達手段の重要性，③津波被害におけるトリアージタグの特異性であった．

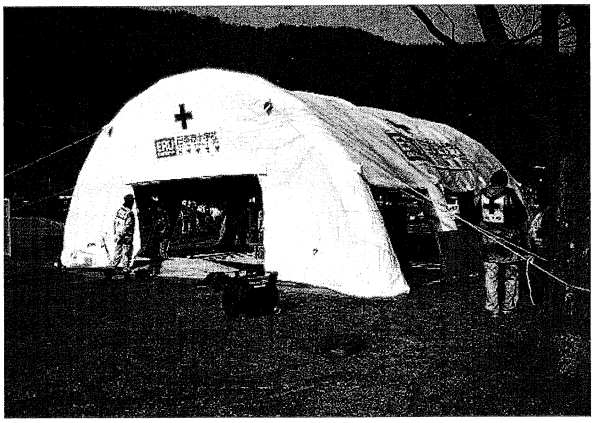
発災から日が浅く，テレビ，携帯電話，インターネットなどが不通で，今回の地震の規模や現在自分がいる場所の安全性，避難所へ行く道路の安全などの状況を全く把握できない中で医療救護活動を行わなければならない難しさを感じた．また日赤岩手県支部や他チーム，市や町の災害対策本部との連絡手段も衛星電話のみで，情報交換も非常に難しい状況だった．

実際に診察した患者は，トリアージタッグの緑が大多数を占め，赤，黄の患者はわずかだった．今回のような津波被害が中心となる場合は，被災者は黒か緑のどちらかに振り分けられてしまい，赤，黄の緊急処置を要するような患者が意外に少ないのも特徴だった．

実際に被災者の診療にあたった時間はわずかで，被害状況と被災者の情報収集に割いた時間がほとんどを占めたことも，発災急性期の特徴かと考えられる．

私達が得た情報を元に，釜石市と大槌町で日赤の医療救護を展開していく足場を造れたことが，今回の救護活動であげられた一定の成果なのでは

ないかという思いと同時に，突発的に起きた災害に対する救護に関し，急性期対応の予想外の難しさを改めて痛感した．



釜石市でのdERUの設営

大槌町の災害対策本部である
中央公民館からの町全体の光景

第２班

５階東病棟看護師長　佐藤徳子

１．活動の概要

１）活動期間　2011年３月16日～20日

２）チーム　７名

俵原敬副院長（班長），佐藤徳子看護師長，
高橋栄樹看護係長，田口佳子看護師，
青山平薬品管理係長，清水雅典主事，
池ヶ谷真基主事

３）活動場所　岩手県釜石市，大槌町

４）活動日程

３月16日　午後１時に県支部に向けて当院を出発し，打ち合わせ後，午後５時に釜石市へ移動

３月17日　午後０時15分に釜石市に到着．神戸赤十字病院より引継ぎ後，国内対応型緊急ユニット（dERU）にて診療開始（翌朝まで）

３月18日　午前８時30分に神戸赤十字病院へ引き継ぎ後，午後５時まで巡回診療

３月19日　午前８時に伊豆・裾野赤十字病院救護班へ引継ぎ後，午前10時まで巡回診療
午後４時に活動を報告．午後４時15分に出発

３月20日　午前３時15分支部到着．午前５時当院到着

２．活動内容

３月17日：釜石市に到着後，dERUにて診療を開始した．役割分担していたが，時には役割を超えて協力し合った．患者の受診理由は風邪等の体調不良が主で，常備薬切れの処方希望も多かった．心筋梗塞を疑う緊急対応の受け入れと搬送対応も行った．診療は24時間対応のため，午後９時からは交替で仮眠をとった．積雪に覆われ，深夜帯に訪れる人は少なかった．

３月18日：午前８時30分から巡回診療に出かけた．釜石小学校では血圧測定や希望する薬剤の補充を行い，避難所管理者からの衛生面での予防管理に関する相談を受けた．寺野弓道場では，大きな体育館が遺体安置所になっていた．広い弓道場が避難所となり，常駐する医師がいて，不足している薬剤や医療材料を補充した．大徳院では，常備薬が途切れないよう，処方を希望する人々が押し寄せた．そこでも，役割分担にこだわらず協力し合った．安渡小学校では，再三の避難警報に土足で対応してきたため，建物内部はすべてが屋外のように汚れていた．トイレは屋外にブルーシートで囲った状態で，掘った穴に缶をはめ込んだものであった．

３月19日：午前10時から巡回診療に出かけた．大槌高校では，診療待ちの列の長さに驚いた．医師一人で診療をしていたため，もう一箇所で診療を開始し，短い時間であったが診療の協力をした．

3．所感

降雪によりチェーンの着脱を６回もするとは，想像もしていなかった．他職種の役割を協力し合うことが多くあった．普段から興味を持って意識しておきたい．

仮設診療所で引継ぎを行う俵原副院長

巡回診療を行う浜松赤十字病院救護班（釜石小学校）

第３班

医事課主事　中島康裕

1．活動の概要

1）活動期間　2011年３月23日～28日

2）チーム　　７名

中野秀樹感染症内科部長（班長），小林ルミ師長，
上月愛子看護師，森上憲子看護師，
二橋智郎服薬指導係長，岩崎張海汽かん係長，
中島康裕主事

3）活動場所

岩手県釜石市dERU（仮設診療所）
上閉伊郡大槌・小槌町（巡回診療）

4）活動日程

３月23日　出発（震災から13日目）
３月24日　釜石市救護所（dERU）診療
３月25日　上閉伊郡大槌・小槌町巡回診療
３月26日　釜石市救護所（dERU）診療
３月27日　業務終了・本部へ報告
３月28日　浜松赤十字病院到着

2．活動内容

私たちは第３班として，３月23日から３月28日まで，岩手県釜石市と上閉伊郡大槌・小槌町に派遣された．

出発は震災後13日目で，災害サイクルから見ると「亜急性期」にあたっていた．

３月23日午後０時30分に出発式を病院エントランスホールにて行い，２台の公用車（キャラバン・ＡＤバン）で向かった．途中日本赤十字社静岡県支部に立ち寄り，支部連絡調整員２人と合流し，県支部職員から派遣場所についての状況や注意事項について説明を受けた．その後，静岡県赤十字血液センターの連絡調整員２人の運転により，マイクロバスで現地へ向かった．出発から約12時間で岩手県支部現地災害対策本部に到着し，その後釜石市救護所である鈴子広場へと向かった（所要時間約１時間）．

鈴子広場では，岩手県支部・兵庫県支部共同設営のdERU（仮設診療所）が展開されており，静岡赤十字病院救護班が救護所業務を行っていた．同院救護班から業務の引継ぎを行い，午前８時から診療を開始した．

救護所業務は24時間体制で行った．１日に訪れる患者は70名から100名位だった．

疾患の概要は，災害期の亜急性期ということもあって，外傷や急性期疾患よりも，上気道感染症や高血圧症等の慢性期疾患がメインだった．また震災によるストレスからか，普段より血圧が高い，夜眠れない，肩こり等で投薬を希望される方が多く，新規患者よりも２回目・３回目といった継続患者が目立った．

地域の医療機関については，この地区の二次救急病院である県立釜石病院を中心に少しずつ機能

し始めていた．また調剤薬局も機能し始め，院外処方も可能となってきていた．しかし，診療所にみえる人には「病院で処方されていた薬と同じ薬が欲しいけど，名称や用法・用量がわからない．病院も薬局も流されてしまった」という方が多く，処方内容の確認業務に非常に苦慮した．国民健康保険団体連合会や社会保険支払基金等も少しずつ機能し始め，地域によっては携帯電話も使える場所が出てきたこともあり，なんとか対応できた．

被災者の方々は，表面的には落ち着いて見えたが，家や家族を目の前で津波にさらわれた等の悲惨な体験をされた方の話を聞くと，心の痛みを覚えた．

救護３日目は姫路赤十字病院救護班に救護所業務を引継ぎ，巡回診療業務を行った．活動は上閉伊郡大槌町・小槌町を中心に，合計９箇所を巡回した．巡回場所は地域の公民館や小学校・集会場所・高齢者施設等で，そこでも急性期疾患よりも慢性期的な疾患が多く，診療のメインは処方だった．巡回診療では，限られた人数と医療資源の中で多くの人を診察し，土地勘がない場所で９箇所もの避難所を回らなくてはならず，避難所によって規模や医療ニーズが異なるため，時間配分に非常に苦慮した．また，巡回場所によってはすでに医師や自衛隊が介入しているところもあり，巡回診療が必要ない場所もあった．そこで，他の救護班と協議して調整を行い，翌日から巡回診療に行く場所や回数を減らした．その結果，一つの場所でより多くの人に時間を費やすことができ，手厚い診療を行うことができた．

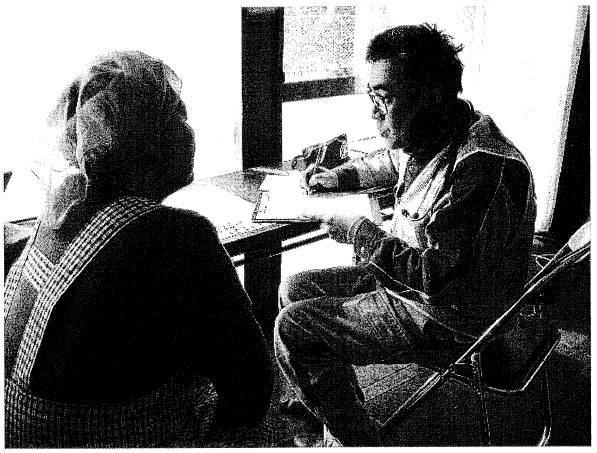
４日目は再び鈴子広場にて，再度のdERU24時間救護所業務にあたった．

今回の救護活動を通して，自然災害の大きさと恐ろしさを実感した．

また赤十字のネットワークの広さや赤十字に勤める職員としての誇り，そして他職種・他機関との協働の大切さを改めて感じることができ，短い期間だったが非常に良い経験ができたと思う．自分たちが貢献できたことは本当にごくわずかであったと思われるが，無力ではなかったと感じている．

東海地震・東南海地震が起きると言われて早数年…．今回の救護活動で得た経験や知識を今後に活かし，もしもの時に迅速かつ適切に対応できるように，日頃から訓練していきたいと思う．

日本赤十字社静岡県支部にて出発式



巡回診療で診察にあたる中野部長

第４班

企画課主事　岡村直哉

１．活動の概要

１）活動期間　2011年４月６日～10日

２）チーム　６名

浮海洋史総合内科部長，中村澄子看護師長，金原弘枝看護師，武田恵美薬剤師，内藤勇夫電気係長，岡村直哉主事

３）活動場所　宮城県石巻市

４）活動日程

４月６日　前泊地山形県へ移動

４月７日　石巻赤十字病院救急外来支援業務
大規模余震発生後対応支援

４月８日　石巻ロイヤル救護所日勤帯業務
４月９日　患者搬送業務
４月10日　後泊地山形県より帰還

２．活動内容

浜松赤十字病院第４班は，宮城県石巻地区での救護活動に従事した．

石巻赤十字病院内会議室で開かれた１日２回（午前８時，午後６時）の災害対策本部ミーティングにて，石巻市内の各エリア状況が報告された．同時に災害対策本部より現地活動救護班への伝達事項が発表され，当班は，日毎に異なる活動に従事した．

現地活動１日目の石巻赤十字病院救急外来支援業務従事中（４月７日午後11時32分）に，宮城県沖を震源地とした震度６強の大規模余震が発生した．これにより，同院内での患者トリアージエリアと臨時救護所設立に立ち会い，診療補助等に従事した．

４月７日（活動１日目）
・石巻赤十字病院救急外来準夜帯支援
（午後５時～午前０時）
・大規模余震発生後活動支援
（午前０時～午前１時45分頃）

朝の災害対策本部ミーティングにて，準夜帯での石巻赤十字病院救急外来支援が決定した．活動開始までの時間を利用して，救急外来の業務や設備内容の確認と説明を，東京厚生年金病院スタッフより受けた．

その後，翌日従事予定のロイヤルホープ救護所（石巻ロイヤル病院の東病棟４階を借入れて開設した赤十字の臨時救護所）にて，対応チーム合同ミーティングに参加し，救護所の運用確認を行なった．午後は石巻市内の海岸線付近まで移動し，災害状況を視察した．

救急外来では，鹿児島大学病院救護班と合同で中等症エリアを支援した．

同外来では中等症と重症のエリアを分けており，本来の救急外来の隣に位置する健診センター内に臨時設置された中等症エリアでの活動となった．

石巻赤十字病院内は，電子カルテシステムが復旧稼働していた．救急外来受付窓口で患者受付・患者登録を行ない，災害カルテ（救急外来専用の手書きカルテ）を作成後，問診結果により診療エリアを振り分けていた．一次振り分け後，各エリア受付にて再度患者受付・患者情報登録・問診等を実施後，診察を行なった．

診察室では，電子カルテにてオーダ入力を行ない，手書きで災害カルテへ所見等を記入した．

【救急外来（中等症）患者受入内訳】

	男性	女性	合計
乳幼児（０～４歳）	5	4	9
成　人（５～74歳）	19	21	40
高齢者（75歳以上）	5	3	8
合　　計	29	28	57

【大規模余震発生後経過（時刻はおよそ）】
23：32・宮城県沖大規模余震発生（石巻市震度６強）
以降，数度の余震を体感する
23：50・災害対策本部仮設置の放送
・石巻赤十字病院職員の災害緊急出勤
・病院正面玄関を封鎖し，院内への出入りを制限
00：05・災害対策本部正式設置の放送
・院内業務従事中の救護班へ継続待機指示
・石巻市内展開中の全救護班に，石巻赤十字病院へ緊急招集連絡
・院内診察中の患者を速やかに終了し，帰宅させる旨の放送
・正面玄関前に被災患者が並び始める
00：15・正面玄関入口に，トリアージエリア設置開始
・臨時診療エリア（中等症・軽症），仮設病棟の設置（重症エリアは救急外来を継続使用）
00：30・正面玄関入口にて被災患者のトリアージと受入れ開始
（受入れ開始時，トリアージ医師：２名，患者：約10名程度）
・正面玄関入口外に，dERU設置開始
00：58・宮城県津波警報解除の放送

01：00・dERU設置を確認
01：25・第15エリア（日赤医療センター／松山／大分／富山／浜松）ミーティング
各班の従事予定を確認し，当日の病院補助体制を決定
01：45・浜松赤十字病院班，石巻赤十字病院より撤収
02：30・全救護班，石巻赤十字病院支援待機体制解除

【余震後受入患者状況(午前０時30分～午前３時頃)】
・軽症　　11名（内科系：３名，外傷：８名）
・中等症　19名（内科系：１名，外傷：18名）
腸閉塞にて，１名入院
・重症　　１名（心肺停止状態で搬送）

大規模余震発生時は，机上のPC用モニタ等が落下する程の揺れを体感した．院内の電源が非常用電源に切替わったが，使用中のPCは全てダウンした．石巻市内はほぼ全域で停電し，病院撤収時点で，全ての信号機が停止している状況だった．水道も広範囲で断水するなど，震災発生から約１カ月が経過して復旧へと向かっていた市に，再度大きな被害が発生した．

また，一部のキャリア（携帯電話事業者）を除いたほぼ全ての携帯電話が，翌日中まで使用不可となった．

４月８日（活動２日目）
・ロイヤルホープ救護所日勤業務
・石巻赤十字病院への招集，待機

余震により，トリアージ再開のための打ち合せ

（医師，師長各１名）
・ロイヤルホープ救護所受入れ患者搬送（同上）
・石巻赤十字病院臨時救護所へ看護師派遣
（看護師１名）

前日夜間の大規模余震発生に伴い，早朝に，災害対策本部より石巻市内に展開中の全救護班に対し，石巻赤十字病院への召集連絡が入った．

当日は日赤医療センターとの２班体制で，ロイヤルホープ救護所の日勤業務に従事予定であった．このため，２班で合同チームを組み，それぞれ２病院混合の救護所待機班と石巻赤十字病院待機班に分かれ，それぞれの活動に従事した．

救護所待機班は，入所患者へのケア，患者提供食（レトルト食品等の非常食を使用）準備，救護所内薬品在庫状況整理，救護所内の運用管理見直しと情報整理，災害対策本部報告等を行なった．

また，災害対策本部より石巻赤十字病院臨時救護所の立上げに伴う医師・看護師派遣の要請があり，当院救護班より看護師１名が中等症エリアの看護支援活動を行なった．

石巻赤十字病院待機班は，待機中に災害対策本部よりロイヤルホープ救護所に受入れ予定患者の病院への搬送指示を受け，大分赤十字病院主事とともに向かったが，受入れ予定患者所在不明により収容できなかった．

４月９日（活動３日目）
・患者搬送業務
・石巻赤十字病院薬剤部支援（薬剤師１名）
・車載資材確認，物品整理

第４班のメンバー

災害対策本部からの指示により，避難所から収容施設へ自力での移動が困難な患者の搬送業務に従事した．収容予定の避難所が複数個所に分散していたため，班を２つに分け，それぞれ患者搬送を行なった．

薬剤師１名は，石巻赤十字病院の薬剤部支援活動に当たった．

また次派遣救護班引継ぎのため，車載資材・物品等の確認・情報整理を行なった．

【搬送患者内訳】

・蛇田公民館（１名）→遊楽館
・蛇田中学校（２名）→遊楽館
・石巻赤十字病院（１名）→ロイヤルホープ救護所

第５班

１．活動の概要

会計課調度係長　伊藤晴康

１）活動期間　2011年４月17日～21日
２）チーム　５名
井出協太郎呼吸器科部長（班長），
稲垣貴子看護師長，小田木敦子看護師，
伊藤晴康調度係長，上林豊司企画係長
３）活動場所　石巻市立大須小学校
４）活動日程

４月17日
7:30　浜松駅にて静岡駅までの切符購入（浜松５名分）
8：00　浜松駅集合
8：10　浜松駅発　車中ミーティング
8：35　静岡県支部に車を取りに行く
9：00　静岡県支部出発
9：10　静岡駅にて持ち物積込
9：20　静岡駅発
9：25　静岡IC
9：50　富士川SA　給油
11：00　海老名SA　昼食
12：50　蓮田SA
14：05　上川内SA
16：00　国見SA
16：50　村田JCT
17：15　山形蔵王IC
17：45　ホテルゆさ着
20：00　４月18日の情報収集とミーティング

４月18日
4：00　起床
4：15　荷物と食料積込
4：55　ホテルゆさ出発
5：35　村岡JCK　移動中車内で朝食（パン）
6：55　石巻赤十字病院着
到着報告・救護内容ミーティング
8：30　石巻赤十字病院発
9：30　雄勝総合支所　高山赤十字病院と合流
10：10　大須小学校着　高山赤十字病院と引継ぎ
12：30　昼食
13：00　救護所運営準備
14：00　体育館巡回診療
15：00　大須小学校内保健室で救護所運営
18：00　大須区長会議
18：30　救護所終了
18：30　大須小学校本部へ終了報告
21：00　消灯（計画停電のため）
本部と救護所は自家発電にて電源確保
救護所は投光器２台確保
21：30　投光器点灯確認

４月19日
6：00　起床　朝食準備
7：00　朝食
8：40　総合支所会議出発
9：00　救護所運営開始
12：00　午前終了
13：30　地区巡回
13：30　体育館巡回
15：00　救護所運営開始

16：20　体育館巡回
18：30　救護所終了
19：00　大須小学校本部へ終了報告
21：00　消灯（計画停電のため）

4月20日
6：00　起床　朝食準備
7：00　朝食
8：40　総合支所会議出発
9：00　救護所運営開始
名古屋赤十字病院と引継ぎ
11：00　地区訪問　1件
12：00　午前終了・救護所撤収
14：20　地区巡回・往診
15：10　大須小学校出発
16：35　石巻赤十字病院着　報告・処方箋提出
17：10　石巻赤十字病院発
17：15　給油
17：50　コロボックルハウス着（次の班の予約のため）
18：00　コロボックルハウス発
19：10　古川IC
19：25　鶴巣SA
20：35　山形蔵王IC
20：55　ホテルゆさ着
21：30　救護資材等整理
22：10　石巻赤十字病院から処方内容について確認の電話

4月21日
6：55　朝食
7：20　ホテルゆさ発(ゆさのマイクロバス)
7：40　かみのやま温泉駅着
8：14　山形新幹線発
11：08　東京駅着
12：03　東京駅発
13：35　浜松駅着

2．活動内容

呼吸器科部長　井手協太郎

私たちは第5班として，4月17日から21日まで，宮城県石巻市の雄勝町（おがつちょう）に派遣された．メンバーは，看護師が救急病棟の稲垣師長，4階東病棟の小田木主任，引佐赤十字病院の伊藤宏子師長，薬剤師が以前当院におられた引佐赤十字病院の牧田課長，主事は当院企画課の上林係長，会計課の伊藤晴康係長と私の合計7人であった．当院の伊藤さんには阪神大震災での活動経験があり，その時の体験談などを伺った．

出発日は，静岡赤十字病院のメンバーと静岡で合流したのち，前泊地の山形を目指して北上した．東北自動車道は，多少の傷みはあったが既に開通しており，夕方遅くに山形に到着した．

翌朝は朝4時半起きで出発し，仙台自動車道を経由して石巻市に向かった．名取市の辺りでは，右側の海側は大半が津波で流されていたが，土手状の高速道路が堤防となって，反対側はそれほどの被害がない状態だった．

石巻赤十字病院は，海辺から数年前に移転してきたということで，海から数キロ陸側にあり，大きな被害はなかったようであったが，それでも正面玄関から水が流れ込んできたとのことだった．玄関前には熊本赤十字病院のDMATがテントを張っており，震災から一カ月以上いたのかと感心した．

今回の派遣で心に残った事の一つは，赤十字のパワー，すなわち組織力である．石巻赤十字病院内の災害対策本部は，この地域の災害拠点に偶然なったということ以上に，非常に充実していた．すなわち，本部長の先生を中心に，事務の方々，実動部隊の方々，医師，看護師が，それぞれに被災の状況，現況，不足している物資などを各地域ごとに細かく把握しており，指令系統が確立され，フィードバックされた問題が適切に処理されていた．一カ月経っての状況なので，最初はもっと混乱していたのであろうが，そこからここまで完成された状態になれるのは，過去の災害対応や日頃の訓練の成果なのだろうと感じた．また，到着してすぐに，本部の方とも打ち解けて話せたのは，同じ赤十字の元で働いているためであろうと思われた．お互いに初対面でも，同じユニフォームを着ていることで，仲間意識が生まれるのであろう．こうしたことから，日本全国に広がっている赤十

字は，一つの大きな力となっていることを改めて感じた．国立大学や医師会の方も来られていたが，初めは必ずしもこうではなかった．

私たちが派遣された雄勝町に向かう途中，集落ごと流されてしまった地域や，多くのお子さんが犠牲となった大川小学校の近くを通り，同じ位の子供を持つ親として，本当に心が痛んだ．現場付近では，自衛隊の方々が，棒などを持って捜索を続けておられた．

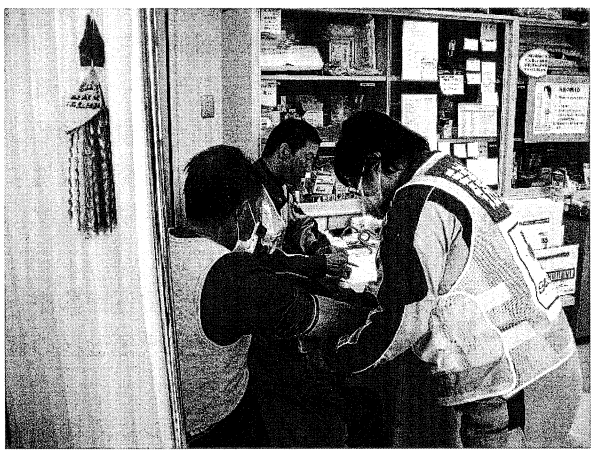
雄勝町は，ひと言で言えば町全体が流された状態だった．小さな港町であるが，港周辺はそれこそ鉄筋の構造も変形するほど，電柱が折れて内部の鉄筋が引きのばされているほど大きな力で流された状況だった．被害は港から２キロ以上離れた山のふもとにまで及んでいた．海は静かな入り江という感じであったが，そこに家の屋根だけが数カ所浮いていて異様だった．津波の時の町の様子などを直接伺うことはできなかったが，早めに高台に逃げた方は助かったものの，多くの方が犠牲になったとのことであった．雄勝町立病院は３階建てであるが，津波で全ての窓が割れ，３人おられた医師も行方不明となったとのことである．

私たちの実際の活動場所は，雄勝町よりさらに半島の奥にはいった大須地区だった．そこは強い岩盤の高台にあり，活動拠点の大須小学校も，少し壁が崩れた程度だった．海岸付近の家屋は被害を受けたようだったが，高台の多くの家は被害が少なかったとのことだった．大須地区は元から俗にいう過疎地域であり，それが中規模集落の雄勝町に医療，福祉等も依存していた状態であったのが，雄勝町が壊滅してしまったことで，医療を始めとするサービス不足の状態になっていた．特に震災当初は，町へ向かう一本道の通る雄勝町がかような状態になり，陸の孤島状態となって，ヘリコプターが来るのに数日かかったとのことである．

震災発生後一カ月以上が過ぎ，現地の状態は比較的落ち着いていた．寝たきりの高齢者は一部を除いて他県などに移送されており，残っているのは比較的元気な高齢者や地元の方々だった．地元の方が困っておられたのは，雄勝町の病院が無くなって，一番近い診療所に行くにも車で一時間以上かかることや，まだ水やガスなどの不通が続いていることだった．大須小学校でも自衛隊の方々が活躍されており，一日おきにお風呂を大きなテントで提供したり，体育館に避難している方々にガソリンで動く大型炊飯器でご飯を作ったりしていた．やはり，こうした状況で生活していくには，彼らのようなサバイバルのプロの助けが必要だと感じた．

私たちは，当地での前任である高山赤十字病院から引き継いで，午前午後の外来診療（感冒や定期内服など）を行い，合間に体育館の避難所を回って，現地の方とお話をした．看護師さんたちや私とで，皆さんに声かけをしながら血圧を測ったり，話し相手になったりした．この地区には家族が犠牲になったりした方はそれほど多くなく，ふさぎこんでいる様な方もそれほど見受けられず，皆さんとも比較的お元気でおられたが，なかなか元の生活に戻れないことにあきらめムードが漂っていた．看護師さんたちには，家にまだ居られる

救護所のある石巻市立大須小学校



大須小学校の保健室で診療を行う井手呼吸器科部長

高齢者宅の巡回診療もやって頂いた．

私たちの活動は，震災の亜急性期から慢性期にあたる時期であったようで，最初の頃に行かれた班の方とは大変さが比較にならないが，災害にも病気や事故，疾病のように時期の変化があり，その時期に応じた対応と援助が必要だと感じた．

雄勝の町が港からかなり奥まで洗いざらい流された廃虚となった姿をみて，次のように感じた．私たちは，近代文明の中で，自然でも何でも人間の自由に操れるようになったと感じることがあるが，それはきっと間違いだと．やはり自然の力は強大であり，人間の力ではどうにもならないものなのだと改めて感じた．我々人間は，自然の力を忘れることなく，その中で謙虚に慎重に生きていくしかないのだと思う．そのために，災害に対する準備と心構えをあらかじめ用意する必要があるのだと思う．

また，災害で多くの人が再認識させられたのは，健康でいること，元気でいることのありがたさと，家族や友人など人間同士の絆の重要性である．そして私たちは医療者として，患者さんの健康や命を守ること，その家族にとって大事な人である患者さんを治療するという重要な任務を担っているのだということを再確認した．

私が実際に貢献できたことは本当にわずかではあったが，今回派遣して頂いたことで，医師として自分が何をしていくべきか，何を求められているかを考え直す機会にもなった．そして，初心を忘れずに，地道な医療をしていきたいと思うようになった．残念ながら私は浜松赤十字病院を去ることになるが，これからも赤十字の活動を微力ではあるができるだけ応援していくつもりでいる．

最後に，一生懸命働いて頂いた救護班メンバーの方々，後方で支援して頂いた病院関係者の皆さんに，改めて御礼を申し上げます．

第６班

小児科医師　小林正人

１．活動の概要

１）活動期間　2011年５月15日～５月20日

２）チーム

小林正人小児科医師（班長），
大西清美看護師長，土屋雅子看護係長，
鈴木みさ子看護師，小林美絵薬剤師，
古山智一企画課主事，
水谷全志リハビリテーション技術課理学療法士

３）活動場所　宮城県石巻市　雄勝地区

４）活動日程

５月15日　浜松から新幹線で仙台まで移動し，レンタカーで石巻まで移動．現地にてブリーフィング，ミーティングに参加

５月16日　水浜保育所の避難所にて巡回診療

５月17日　大浜地区，羽坂地区，大須地区の個人宅を巡回診療

５月18日　名振コミュニティーセンターの避難所にて巡回診療．その後，大須小学校保健室にて救護所診療

５月19日　大須小学校の救護所で診療を行い富山赤十字病院，高山赤十字病院に診療の引き継ぎを行い，仙台に移動

５月20日　仙台から浜松まで新幹線にて移動し，解散

２．活動内容

石巻市街地から車で１時間程の所に位置する雄勝半島での巡回診療と，大須小学校内に開設された救護所での診察が主な仕事であった．

現地で訪問看護を行っている看護師の情報に基づいて避難所や個人宅を訪ね，巡回診療を行った．病院に通う手段のない方に対しての降圧薬などの継続処方や，長引く避難所生活での感染症への対応が，診察内容の多くを占めた．救護所には車で来院される方が多かったため，石巻市街で診察を再開した開業医の情報なども合わせて提供し，もとの地域医療の形態に戻していくことを開始した．

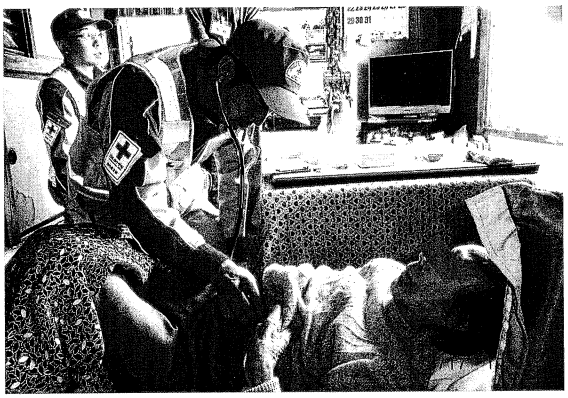
震災から２カ月が経過し，ライフラインの中で最後まで復旧が遅れていた水道が整備され，水が出るようになる直前の状態であったため，自宅で

生活を始める人が増え始めていた．それまでは避難所で暮らしていたため，あまり感じていなかった喪失感などが自宅に帰ることで出現し，精神的なフォローが必要な人がみられた．生きがいであった海での仕事が出来なくなってしまった，家族が亡くなった，仕事に戻りたいが新たに借金をしないと始められない，介護が必要な母親と一緒に暮らすことになったなど，それまでは生きるために皆が同様に必死であった状態から，それぞれの悩みや不安が出始めている状況であった．

そんな中でアルコール依存症になってしまった人の自宅を訪ねる機会があった．１時間程話をさせてもらい，翌日も自宅を訪ねたが，何度も診察やカウンセリングが必要な疾患に対して，巡回診療で順番に引き継いでいく方式では限界があると感じた．

一方で可能性を感じたこともあった．雄勝地区はもともと町内会などの地域のコミュニティーがしっかりしているところであったため，一人暮らしのご老人宅にも近所の人が水を運んだり，救援物資を運んだりしながら健康状態などを把握するシステムが震災後に出来上がっていた．これらと訪問看護を結びつけて，すばやく医療の介入が行えるシステムを構築することが出来れば，他の医療過疎に悩む地域の参考になるようなことが出来るのではないかと思われた．

石巻市街地では避難所や臨時の診療所が徐々に閉鎖されつつある中で，雄勝半島に唯一あった雄勝病院が震災で無くなってしまった．この地区においては，常駐医師のいる診療所の開設や重症患者の搬送方法などを，行政主導で解決していく必要があるのではと考えられた．



震災でそれまで住んでいた家が無くなり，息子さんの住んでいる高台の家に同居するようになった80台の女性．圧迫骨折があり，トイレまで段差のあるところを這いながら移動していた．

避難所での診察風景．小さな病院として効率よく仕事をするために，臨機応変な対応が大切であった．近くで他のメンバーの仕事ぶりがみられたことは，救護活動から戻ってからも，チーム医療を意識し，他の職種の人への感謝を忘れない貴重な経験となった．

第７班

医事係長　**飯島昭一**

１．活動の概要

１）活動期間　2011年６月19日～24日

２）チーム　　７名

清野徳彦乳腺外科部長（班長），
松山麻須美看護副部長，原田浩代看護係長，
佐々木嘉美看護師，村松英彰薬剤師，
佐々木昌俊放射線画像診断課長，
飯島昭一医事係長

３）活動場所　宮城県石巻市

４）活動日程

６月19日　石巻赤十字病院へ移動
　　前班（飯山赤十字病院）からの引継ぎ
６月20日　雄勝地区の巡回診療及び
　～23日　雄心苑救護所での診療
　　後班（静岡赤十字病院）への引継ぎ
６月24日　後泊地宮城県仙台市より帰還

2．活動内容

浜松赤十字病院第７班は，宮城県石巻市雄勝町に開設された雄心苑救護所での医療活動と雄勝地区での巡回診療に従事した．当救護所は，高台に位置していたため比較的被害の少なかった特別養護老人ホーム「雄心苑」の建物を使用し，このエリアの役所機能として開設された「雄勝総合支所」内に設置されていた．

このエリアには震災前約４千人の住民が暮らしていたが，派遣当時は約８ヶ所の避難所に約600人の被災者が避難している状況であった．

現地にあった石巻市立雄勝病院は，常勤医師３名全員が死亡し，建物も壊滅的被害を受けた．

この地域は高齢者が多く，移動手段も自動車以外は徒歩しかない様な状況で，急斜面や内陸部の高台に独居で住んでいる住民も多く見られた．震災発生後３カ月余を経過し，石巻地域では14チーム137名が活動していたが，医療のニーズは減少してきていた．石巻市内の開業医は機能を取り戻しつつあり，84ヶ所，全体の約９割が復旧していた．このため７月以降は４～５チームでの活動で良いのではないかという意見もあり，今後は被災地の自立を促すために規模を縮小していく方向で行政は考えているといった状況下での派遣であった．主な活動は，週間スケジュールに基づいた周辺地域の避難所や仮設住宅，個人宅への巡回診療と救護所での医療活動であった．

以下に日ごとの具体的活動内容を記す．

６月19日（第１日目）

午前９時10分に浜松駅を出発し，新幹線と高速バスを乗り継ぎ，午後４時30分に石巻赤十字病院に到着した．すぐに石巻圏医療合同本部へ到着を報告し，本部とのブリーフィングを行い，前班の飯山赤十字病院から救護活動の引継ぎを行った

その後，午後６時からの石巻圏医療合同本部での全体ミーティングに出席した後，市内旭山農業体験施設「コロボックルハウス」へ移動し，宿泊した．

６月20日（第２日目）

午前７時に宿舎を出発し，車両２台で雄心苑救護所へ移動した．所要時間は約１時間30分であった．到着後，地元の保健師から救護所のオリエンテーションを受けたが，血液検査（末梢血，生化学，CRP）とレントゲンが施行可能な状況であった．

〈午前〉雄心苑救護所　２名診察
　　水浜仮設住宅（巡回診療）　４名診察
　　個人宅１軒（巡回診療）　１名診察
〈午後〉雄心苑救護所　２名診察

同日予定の活動を終え，午後６時からの全体ミーティング及びエリア毎に行われるヒアリングに参加した．

６月21日（第３日目）

〈午前〉大須小学校（巡回診療）　11名診察
　　個人宅４軒（巡回診療）　４名診察
〈午後〉雄心苑救護所　患者無し

終了後，午後６時の全体ミーティングに出席した．

６月22日（第４日目）

宿舎より救護所へ移動し，週刊東洋経済の記者

避難所（大須コミュニティセンター）での巡回診療

雄心苑救護所にて地元の保健師さん達と

から取材を受けた後，巡回診療に出発した．
〈午前〉名振コミュニティーセンター
（巡回診療）13名診察
〈午後〉雄心苑救護所　２名診察
終了後，午後６時の全体ミーティングに出席した．
６月23日（第５日目）
明け方より雨が降り続けていた．午前６時51分に震度４の地震があった．岩手県に津波注意報が発令される中，宿舎を出発し救護所へ向かった．
〈午前〉雄心苑診療所　１名診察
個人宅３軒（巡回診療）　７名診察
〈午後〉雄心苑診療所　１名診察
個人宅１軒（巡回診療）　２名診察
予定の業務を終了し，午後３時45分に石巻赤十字病院の石巻圏医療合同本部にて救護日誌を提出し，全日程の業務終了を報告した．後班の静岡赤十字病院へ引継ぎを行い，高速バスで後泊地の仙台市へ向かった．
○６月24日〔第６日目〕
仙台駅を出発し，午後１時33分浜松駅到着．６日間の全工程を無事完了し，解散となった．

こころのケア

第１回

看護師　小島綾子

１．活動期間　2011年６月２日～７日
２．チーム
静岡支部　小島綾子看護師，白柳かな美主事，武田恵子看護師長(静岡赤十字病院)，鈴木直子看護係長（同上）
広島三原赤十字病院（４名）
大分赤十字病院（４名）　計12名
３．活動場所　宮城県石巻地区避難所
４．石巻地区の被災概要
市内中心部では主要道路の瓦礫は撤去されていたが，破損している場所の修復はまだなされておらず，非常に埃っぽかった．地盤沈下が起こったので，雨降りの翌日は冠水していた．被害の大きかった港周辺は殆どの家屋が倒壊し，所々残っている建物も内部に瓦礫が詰まって住める状態ではなかったが，撤去作業はまだ始まっていなかった．
津波被害にあった地域は壊滅状態であったが，道路を隔てた反対側ではもとの家で生活ができるという状態で，被害の格差が著しかった．
医療機関は郊外に位置する石巻赤十字病院が中心になり，診療・救護を統括していた．学校は避難施設になっており，避難生活者の側で授業が行われていたりした．
５．作業内容
こころのケア日本赤十字社通算第14班には門脇・石巻地区，渡波地区，住吉地区の地域割り当てがあり，看護師３名，主事１名の３グループに分け，担当地区を固定し巡回することにした．それぞれの地区には避難所が２～３か所あり，前班から申し送られた対象者を継続してみていくことにした．また避難所内の人達のみならず，炊き出しに訪れる周辺住人の声にも対応した．

第２回

看護係長　川合　晴美
看護師　井上美和子

１．活動期間　2011年７月４日～８日
２．チーム
静岡支部　川合晴美看護係長，井上美和子看護師，丹羽君枝看護師長(伊豆赤十字病院)，理崎靖紀主事（同上）
他，広島チーム４名と長崎チーム４名の計12名で活動
３．活動場所　宮城県石巻地区の避難所
４．避難所の環境
各避難所によって住環境はかなり異なっていた．いまだ電気も水道もままならない所があれば，テントの入浴設備が常設され自由に入浴できる所もあった．
食事に関しては，毎日同じメニューを支給されている所や自炊されている所もあった．各避難所に共通して言えることは，ハエ対策に苦慮されて

いたことだった.

5．作業内容

巡回（午前９時～12時頃）

（午後１時～３時）

避難所に避難されている被災者，及びそこを統括されている自治の方，ボランティアの方等に対し，体調を伺いながらこころのケアを実施した.

石巻赤十字病院の臨床心理士を中心に，地区の保健師や市民病院の看護師（被災され業務不能）とコンタクトを取り，活動に当たった.

毎日の巡回終了後は，臨床心理士と共にミーティングを行い，今後もこころのケア班の見守りが必要な方をピックアップした.

6．その他

避難所に関わる方の中には，頑張り過ぎて自分の体調の変化に気付かない方もみえた．こころのケアは，被災者のみならず，そこに介入されている全ての方を対象に行っていくことが大事であると感じた.

石巻赤十字病院ＥＲ支援

看護係長　髙橋栄樹

1．活動期間　2011年６月13日～23日

2．活動場所　石巻赤十字病院　ER

3．支援要員　ER支援日本赤十字社通算第13班として各赤十字病院から８名派遣（うち当院派遣は１名：看護係長髙橋栄樹）

4．活動内容

石巻赤十字病院のER支援第13班として，赤エリアと黄エリアに分かれて活動した.

活動期間中の患者数は，平日１日100名前後（うち黄エリアは50名前後），休日１日150～170名（うち黄エリアは110～120名）であった.

赤エリアは日勤・準夜・深夜，黄エリアは準夜のみのシフトであった．業務の凡そは，外来診療介助（処置，採血，点滴）や放射線科への付き添いなどであった．入院が必要な患者に対しては病棟への申し送り，手術が必要な患者に対しては手術出しも行った．処置時や入院患者などに対しては，電子カルテの入力も可能な限り行った.

赤エリアでは，点滴の実施などは石巻赤十字病院の看護師が行った．黄エリアでは電子カルテ上の実施は行わず，点滴や処置は紙による運用であった.

5．所感

第13班が活動した期間はERで対応する患者数が比較的減少していたとのことであったが，それでも救急外来で黄エリアの患者すべてを診療することは困難であると感じるほどの患者数であった．実際に活動してみると，ER支援看護師の責任と権限が不明確であった．一般病棟の看護師より黄エリアでの点滴が実施されていないとの意見があるなど，ER支援看護師がどこまで実施して良いのか困惑する場面が幾度かあった．また，石巻赤十字病院は３交替であるが，ER支援看護師は２交替を行うこともある．石巻赤十字病院看護師にとって２交替に対しての理解が得られにくい場面もあり，勤務の取り決めの周知徹底が必要であると考えられた.

石巻赤十字病院（事務）支援

総務課社会係主事　守田誠祐

1．活動期間　2011年４月24日～29日

2．活動場所　石巻赤十字病院

3．支援要員

石巻赤十字病院支援要員（事務）日本赤十字社通算第９次として，全国の赤十字施設から８名派遣された．うち当院派遣は１名（総務課社会係主事　守田誠祐）であった.

4．活動内容

主な活動内容は，「石巻圏合同救護チーム」の対策本部への支援業務と，「石巻赤十字病院」業務の補助であった.

「石巻圏合同救護チーム」とは，宮城県災害医療コーディネーターを県知事から委嘱された石井医師（石巻赤十字病院外科部長）の下，行政のほか各関係機関と連携を取りながら石巻医療圏（石巻市・東松島市・女川町）の災害医療を担う組織で，全国の各団体から応援に来た医療チームが円滑に救護活動を行えるよう統括していた．そのチームの支援に全国の日赤から派遣されている事務職員の主な業務内容は，①救護班受付対応，②各種データ管理，③避難所情報アセスメントの整理などであった．

また，石巻赤十字病院の補助業務として，①平日午前の受診受付整理券の配布や患者誘導，②準夜帯のER（黄エリア）の受付業務などを支援した．

5．所感

今回，石巻赤十字病院の支援要員に加わることができ，大変光栄に感じている．「石巻圏合同救護チーム」が実際どのように運営されているのかを見て感じたことは，災害対策本部長をサポートする体制の重要性である．そのためには，医師・看護師のほか，コメディカルや事務職員等のシームレスな支援体制が院内全体並びに日赤の全社的応援で行われないと，被災地病院の機能を継続させることはできないと思われる．よって，今後，当院が被災地域となる場合に備えて，実践的な受援計画を立てておくよう取組んでいきたい．